

主はモーセに言われた。「見よ。わたしはあなたがたのために天からパンを降らせる。…」
(16:4 節)

(1～3 節) イスラエルの人々は、雲の柱に導かれて、(1、2 節)「…エリムから旅立ち、エジプトの地を出て、第二の月の十五日に、エリムとシナイとの間にあるシンの荒野に入った。そのとき、イスラエルの全会衆は、この荒野でモーセとアロンに向かって不平を言った。」何と言ったのでしょうか？(3 節、読む) それにしてもイスラエル人はよく不平を言う人々ですね。不平、つぶやきはイスラエル人の持病のようです。それにしても、彼らは神様の力強いみ腕で、エジプトを脱出して、紅海を渡り、毎日、毎日火の柱、雲の柱に導かれて歩んで来たのに…。彼らはすぐに恵みに慣れて、今までの恵みを忘れてしまったようです。

——— 再び、つぶやき始める ———

それは、エジプトを出てから、ちょうど一か月が過ぎた頃の時でした。再び彼らはつぶやき始めるのです。その理由を、幾つか上げてみましょう。

5 つの理由。 その 1、疲れがたまってきた。

その 2、酷暑が続いた。

その 3、食べる物がなくなった。

その 4、目的地が見えない、果てしない旅による底知れぬ不安が重なった。

その 5、神様への信頼度が日増しに薄くなっていった。

特に、ここでは空腹が追い打ちをかけました。人は誰でも空腹になると、きげんが悪くなります。「この人、本当にクリスチャンなのかな」と、つい疑いたくなる人もいます。

それにしても、つぶやくことは、やはり不信仰の現れですね。日常の現象を、ネガティブに見ているのではないのでしょうか？ 例えば

マーフィの法則ですが、① 洗車すると雨が降る。②道を渡ろうとすると、信号が赤になる。③バスが行った後だった。④ 駅に行くと出たばかり。⑤ 踏切、目の前でいつも閉ってしまう。等々。

——— 民からのつぶやきを聞いておられた神様 ———

(4～12 節) さて、モーセへのつぶやきですが神様は聞いていました。神様は民の不平、不満、つぶやきを全部、聞いていました。そのことが、ここには 4 回も書かれています。

その 1、(7 節)「主に対するあなたがたの不平を主が聞かれたからだ。私たちが何だというので、私たちに不平をいうのか。」

その 2、(8 節)「…あなたがたが主に対してこぼした不平を、主が聞かれたからだ。…あなたがたの不平は、この私たちに対してではなく、主に対してなのだ。」

その 3、(9 節)「…主があなたがたの不平を聞かれたから」

その4、(12節)「わたしはイスラエルの子らの不平を聞いた。・・・」

この様に、イスラエルの神様へのつぶやきは何度も、繰り返されています。

(9、10節) さて、つぶやいている民を指導するようにと、モーセはアロンに言いました。

(9節)「イスラエルの全会衆に言いなさい。『主の前に近づきなさい。・・・』と。」

私たちも、日常生活の中で、つぶやきたくなるような時が、ありますね。その様な時は、

- ① 主に近づきましょう。賛美したり、祈ったりすると、主の聖さに覆われます。いつの間にかつぶやきなど忘れていることに、気づく事でしょう。
- ② 主をしっかり見つめましょう。つぶやきは、いつか祈りに代わっている事でしょう。
- ③ 主の臨在を味わいましょう。つぶやきは、どこかに吹き飛んでいる事でしょう。

——— 雲の中に、主の栄光が現れた ———

(10節)「アロンがイスラエルの全会衆に告げたとき、彼らが荒野の方を振り向くと、見よ、主の栄光が雲の中に現れた。」この場合、「雲」は私たちの不信仰でしょう。でもその不信仰の中から、主はご自身の栄光を現わされたのです。その意味は、不信仰のイスラエルの民が

- ① 神様に対して、正しい恐れを抱かせるため。
- ② 神様に対して、つぶやくことは罪であることを学ぶため。
- ③ 神様がこれから与える食べ物、神の恵みの贈り物であることを学ぶためでした。

——— 肉とパンを約束された ———

(11、12節、読む) 再度、主はモーセに語られました。この様に、イスラエルの神様は、どこまでも大きな寛容をもって、ご自身の民を扱われ、守っておられます。民のあれほどのつぶやきにも、丁寧に答えて、神様は飽きるほど多くの、肉とパンを与えることを約束されたのでした。この様に、神様はいつも、民の罪に対して、恵みを持って答えようとされる神様です。何もわからないで、駄々をこねている子供をなだめている親のように・・・。

そして、いよいよ恵みの神様の御業が起こされるのです。

——— 夕方、うずら(肉)が、朝、パンが与えられた ———

(13～21節) (13節)「すると、その夕方、うずらが飛んで来て宿営をおおった。また、朝になると、宿営の回り一面に露が降りた。」

(14節、読む) 早朝、地には一面に露が降りた状態でしたが、やがて今度は霜のようなものになりました。

(15節)「イスラエルの子らはこれを見て、『これは何だろう』と言い合った。・・・」この「これは何だろう」の言語「マナ」がそのまま「マナ」という名になりました。

(15節) 続けて、「モーセは彼らに言った。『これは主があなたがたに食物として下さったパンだ。』」このようにして、素晴らしいパン(マナ)が、神様から人々に与えられました。

—— マナを集める時の教え ——

さて、マナを集める時の神様からの教えです。

- ① (13B、21 節、読む)「朝、早く出かけて集めなさい。日が出ると溶けてしまいます。」
- ② (16 節、読む)「自分の分、家族の分だけ集めなさい。」
- ③ (19、20 節、読む)「その日のうちに食べなさい。明日まで残してはいけません。」
- ④ (21 節、読む)「毎朝、その日の分だけを集めなさい。」

—— 安息日の過ごし方 ——

(創世記 2:2、3 節)「神は第七日に、なさっていたわざを完成し、第七日になさっていたすべてのわざをやめられた。神は第七日を祝福し、この日を聖なるものとされた。・・・」神が天地創造された時、すでに安息日を守る事が教えられています。十戒が与えられる前にです。

(22～30 節)そして、神様はここで、安息日の過ごし方を教えています。

(22 節)「六日目に、彼らは二倍のパンを、一人当たり 2 オメルずつを集めた。・・・」六日目には、2 倍のマナを集める様に。その理由は、その 1 日分を安息日の食料とするためでした。なぜならば 7 日目にはマナは降らなかったからです。このようにして、神様はこの時代にも、すでに安息日の必要を民にしっかりと教えて、これを守ることを命じておられます (27 節) それなのに「七日目になって、民の中のある者たちが集めに出て行った。しかし、何も見つからなかった。」いつの時代どこの国にも、安息日を守らない人はいるのですね。

安息日に関して、ことばです。

・サアイー・ターナのことば。「一週間の初めに安息日を忘れる者は、一週間の終わりに自分がクリスチャンであることを忘れるでしょう。」

・ビーチャムのことば。「安息日のない世界は、笑顔のない人、花がない夏、庭のない家の様である。」

それにしても「安息日に何もしてはならない」と命じられた神様は、安息日に必要な物を、すでに備えておられるお方なのです。私たちはこのお方から目をそらしてはいけません。私たちある時、神様の鋭いみことばに対して、従う事に不安を感じる時があります。「とても、そんなこと、私には出来ない。今の時代には通用しない」とか言って聞き流そうとします。しかし、そんな、不誠実なところには、恵みの花は咲きません。

主はモーセを通して再度、安息日を守ることを教えられました。(16:28～30 節、読む)

イエス様は言いました。(マルコ 2:27 節)「安息日は人のために設けられたのです。・・・」

———マナの保存 ——

(31～34 節、読む) アロンはマナを保存するために一オメル分(約 2, 3ℓ)を壺のなかに入れました。後の人々に、荒野での旅の生活を教えるためでした。

—— わたしは 生けるパンです ——

(35、36 節) この時以来(35 節)「イスラエルの子らは、人が住んでいる土地に来るまで、四十年の間マナを食べた。彼らはカナンの地の境に来るまでマナを食べた。…」と書かれています。

私たちも同じですね。天国にたどり着くまで、この人生の荒野を旅する間、私たちの霊のいのちの為に、霊なる糧(みことば)をいただき続けなければなりません。その食べ物は、いのちのパンです。そして、それはイエス様ですね。

イエス様は言いました。「わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きます。…」(ヨハネ 6 章 51 節)。

イスラエルの人々は、マナを食べたけれど死にました。しかし、いのちのパンであるイエス様をいただいた私たちは永遠に生きる事ができるのです。希望を持って前進しましょう。